

第三百四十回 青葉会

平成二十六年七月二十四日(木) 午後六時〜九時 丸紅来客食堂(談話室)

〈選者〉 ☆川合万里子 先生

〈出席者〉 今井紀久男 大林猛 小川恭延 柿崎忠彦 後藤保明 小西弘子 豊田ゆたか 福島正明

山崎亜也 山内天牛 伊賀山そらお 久米五郎太 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 中野一灯 古田昇 星田啓子

宮内規雄 渡邊盛雄 赤田堅 川口孤舟 在間(さいま)千恵 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆 早川允章 星田啓子

村田くに子 山崎青史 山本三恵

〈紙上選句〉

《選者吟》 曾孫に囲まれて逝く梅雨の明け 万里子 (隆・く)

芙蓉咲く頂花初花一日花 全

夏休み宿題よりもまづ部活 全

抓まむとするや毛虫の身を投げし 全

初蟬や動脈血を採り了り 全

《五選句》 ☆梅雨湿り和綴緩みし謡本 正明 (万・堅・紀・忠・孤・弘・敏・ゆ・允・く)

上機嫌らしき日傘のくるくると 恵洲 (猛・孤・保・龍・敏・ゆ・青・亜・天)

☆冷奴上手に崩す杉の箸 正明 (万・堅・孤・弘・保・敏・く・亜)

しやきしやきと氷切る音裏通り そらお (保・千・龍・正・亜・三)

☆追い抜きて他人と知れし日傘哉 恵洲 (万・恭・千・正・亜)

この仲はどこに行くのか水羊羹 五郎太 (弘・弘・隆・青)

☆葺切や船頭かすめ天に消ゆ 保明 (万・猛・隆・啓)

スタツブ細胞ありますきつとほととぎす 弘子 (堅・恭・隆・天)

☆床の間の解脱の押隈鰻待つ 全 (万・紀・忠・啓)

炎天を来て斑鳩も白く燃え 啓子 (孤・允・く・青)

☆釣しのぶ昔の恋が透けて見え 全 (万・千・亜・三)

☆夏ばてをすぐ気取(り)どられる電話かな 紀久男 (万・忠・天)

(☆:「る」↓「し」)

小上がりに満面の笑み鱧つくり 全 (忠・敏・三)

☆病魔より主治医の復帰梅雨明け 忠彦 (万・紀・隆)

鈴立てる室町通り鉦の音 五郎太 (保・弘・隆)

拾はれぬ一円玉や梅雨電車 弘子 (猛・龍・亜)

鳴らしみる佐久の草笛夕ごろ 一灯 (恭・ゆ・天)

☆茄子苗を植えて傘寿を迎えけり 盛雄 (万・弘・允)

(☆:「植え」↓「植ゑ」、「迎え」↓「迎へ」)

半夏生蛸食ふならわし古里に 猛 (忠・青)

(孤:「半夏生」と「蛸」季重なり)

都路の山鉾巡行暑気飛ばす 恭延 (堅・く)

(孤:「山鉾」と「暑気」季重なり)

梅雨の雷一つ大きく肚を打つ 全 (猛・龍)

盛岡駅鉄の風鈴響きけり 忠彦 (青・天)

(青:南部鉄の重々しい音が聞こえる)

鉾立(ほこだて)に気張る若衆の顔真赤 保明 (千・ゆ)

宵山に稚児も燥いで京垣塙

全 (堅・啓)

☆ 足下に猫鳴く厨胡瓜揉み
梅の実をジャンプ一番挽ぎにけり

弘子 (允・啓)

片陰を慕ひて少し廻り道

堂哉 (万・猛)

昼顔や昨日の記憶はや薄れ

ゆたか (敏・允)

天神社の裸電球夕涼み

全 (啓・三)

オルガンの大きな欠伸梅雨の明け

正明 (弘・ゆ)

羅(うすもの)やびしりと胸突く帯姿

全 (龍・啓)

星合の夜なり一人酒を酌む

啓子 (紀・千)

茄子の膚齒裏の音を予感せり

規雄 (恭・允)

雷降る日国際情勢論じけり

亜也 (青・三)

懐の物すけて見ゆ紹の紳士

全 (正・天)

初めてのマツカーサー通り百日紅

天牛 (猛・恭)

先端医療に身を託す友夏木立

全 (忠・正)

散髪の小ざつぱりして梅雨明くる

盛雄 (紀・敏)

鉄斎の青緑躍る山水画

紀久男 (く)

(孤：絵に描かれた青緑でしようから、季語になり難い)

全 (堅)

いざ飲まん今日のご褒美冷し酒

猛 (恭)

夕風や焼けた畳の海の家

忠彦 (隆)

釣自慢妻子きずしを黙々と

全 (保)

帰省への荷の一番目持病薬

全 (保)

マラケシユの涼夜を渡る祈りかな

保明 (正)

暴走す薬草ハーブや酷暑来ぬ

健介 (紀)

☆ 釣果(ちようか)割(き)く切つ先雷の光射す

ゆたか (万)

捨てごみの種より咲きし花南瓜

全 (龍)

心頭を滅却できず脳暑し

全 (千)

封切つてしばし新茶の香に憩ふ

一灯 (ゆ)

海越えて摺みに行かむ虹の橋

昇 (孤)

神聖なガムランの音や青田風

全 (紀)

赤坂に残る仕舞屋梅雨曇

亜也 (く)

追悼文書けとの依頼巴里祭

天牛 (紀)

東京タワー設計者からさくらんぼ

全 (三)

飼い犬に噛まれて夏の風邪もひく

全 (正)

●次回青葉会

八月二十八日(木) 午後六時〜九時 (丸紅 談話室)

▲当季雑詠五句 投句二句

九月二十五日(木)

十月二十三日(木)

平成二十六年七月句会報

一 今回は久しぶりの正明さん以下11名出席。投句10名
御覧のように正明さん、惠洲さんが好成绩でした。先生寄贈のドーナツ、ミニチョコ、弘子さんからのヨックモックの菓子、正明さんの「遊佐来・純米」(山形)、亜也さんの「手取川・大吟醸」(白山市)、忠彦さんの「刈穂・大吟醸」(秋田)小生の「八海山・純米吟醸」(新潟俳壇の熊谷監事より)と左党好みが盛り沢山。正明さんの絶妙な駄洒落と相俟て大いに盛り上がりました。
回覧は先生からの「萬緑」創刊号、「萬緑」の選評と合評(弘子さんの作品)、孤舟さんからの「喜怒哀楽」6月号。

二 関係者近詠

並走の列車から舞ふ絮たんぽぽ	万里子	空ひくく紫陽花の咲き揃ひけり	允章
特急や都心発ち早や麦の秋	全	鯉船喫水深く戻りけり	全
楚々と咲くアンネの薔薇よさきくませ	全	朝風やすべるとくに漁舟	全
部活後の宿題励ます夏の星	眞希子	水中花午後のけだるき泡を吐く	恵洲
鯉幟オレと自称の七歳児	全	誇るもの一つ水虫なき足裏(あうら)	全
裏門に若竹乱立伝統校	全	螢見に来よと隠棲の人の文	全
屋敷跡に建売三軒夏柳	全	——大鉄会6月	
ギンガムのクロス立夏へ振り展ぐ	弘子	水音は変口長調山葵沢	孤舟
青梅の未だ面長に尖りたる	全	地球儀に紛争地なし聖母月	全
茎立頃妣に届かぬ手紙書く	全	溪谷の光る波打つ夏つばめ	全
やがて落つ夏の雲雀の詠唱も	全	緑陰の風は流離や我もまた	全
薔薇園の薔薇真紅る魅入りけり	恭延	星涼し遺影は物を言ひたげに	全
百合大樹花付けキトラ古墳展	全	——「俳句四季」七月号	
居酒屋のママは房州初鰯	忠彦	釣人は無念夢想に麦藁帽	盛雄
團十郎一周忌法要(成田山)		明日をのみ見つめし頃や夏帽子	健介
遅桜精進誓ふ大護摩供	紀久男	テニスせし亡き友偲ぶ麦藁帽	紀久男
海老蔵の涙本物春深む	全	曖昧なもの消えゆく昼寢覚	盛雄
左団次の台詞むにやむにや目借時	全	箱庭や瑞穂の里の原風景	健介
——「萬緑」八月号		片陰やレトロ蔵町句を詠みに	紀久男
花中りかも知れず生き中りかも	丹野敦雄	——「きさらぎ句会」七月	
——「俳句」八月号 山西雅子選(秀逸)			
憲法記念日髪七三に分けてみる	全		
——「俳句」八月号 小島健選(佳作)			

三 そらおさん御推奨の本

岡田喜秋著「旅人・曾良と芭蕉」(河出書房)

四 最近見つけた文豪の未発表の句

● 提灯にさはりて消ゆる春の雪 谷崎潤一郎
—— 戦時中に「細雪」の雑誌掲載を中止され、不安な心境を詠んだものらしい(葉書)

● 愚妻病気 心元なき故本日又鎌倉に赴く(前書き)

● 京に二日また鎌倉の秋を憶ふ 夏目漱石

「円覚寺にて」(前書き)

● 禅寺や只秋立つと聞くからに 全 (子規への書簡)

平成二十六年八月十五日

紀久男記